酒の神様も妻に叱られた

土居　修

S事務長からの電話。終業時刻からわずか数十秒しか経っていない。

「土居くん、飲（や）りゆうで」

ドスの利いた声を耳朶に残しつつ、事務室の引き戸を開け、守衛室に入る。

「遅かったですか」と座りながら、問い返す。

「仕事が終わったら、すぐに飲むのが男の美学よ」

男の美学を標榜するのは、立原正秋を措いてほかに知らなかった。県立学校の事務長ごときが有すべき哲学ではないと思った。だが、振り返ってみれば、これも男の美学かと渋々ながら納得していたような気もする。

角刈りで、いかつい顔立ち。映画『仁義なき戦いシリーズ』での広能昌三（菅原文太）に勝る凄みがあった。目力が強くその威圧感から、当時二十五歳のまだ世俗にまみれていない私の新妻は「恐ろしいひと」と彼を表現している。

天が配剤を誤ったのだと私は考えていた。敗戦後の荒廃した広島の街に生きていれば、良きにつけ悪しきにつけ仁侠の歴史を変えた不世出の男として未来永劫その名をとどめたにちがいない。事務長としての名声はいつか忘却の彼方に消えてしまう。そう考えると、あわれでもあった。

今日もまた妻に叱られるのかと思いながらも、湯飲茶椀に湛えられた冷酒を呷る。愉快であるのだが、私の帰りを待ちわびている妻と子が不憫にも感じられた。

私たちの愚にもつかないやりとりを笑顔で聞いている守衛（この呼称でいいのか、不安であるが）のYさん。湯飲茶椀を口に運ぶ動きに規則性があるから不思議。だが、単に酒が好きな好々爺ではない。三嶋神社の神職を代々務める椅原随一の名家の当主なのである。幕末の椅原六志士のひとりである掛橋和泉（養子である）もこの家系に名を刻んでいるが、それだけではない。遡っていけば、聖武天皇（第45代天皇、在位724年から749年）に行き着く。世が世であれば、と畏れ入るしかなかった。県境の小さな県立高校の守衛室で夜な夜な酒を飲むようなオヤジではない。

これもまた、不思議。

「土居くん、カミさんが怖いから、酒を飲むがよ」

Yさんもまた養子であった。家庭における危うい立場に思いを馳せながら、無力感に苛まれたせつない記憶。

「追い出されたら、俺が面倒みてやるよ」と真顔でいうS事務長。

「事務長が嫌なら、わしの家で泊まればいいから」

Yさんのいつものことばがあって、三者三様に酒に没入する。想像力のない非生産的な会話さえもが酒の肴になる、陽春の椅原のタベ。みるみる一升瓶の酒が減っていく。

ときおり、N校長が顔をのぞかせ、飲（や）りゆうねえといって帰っていった。校内で飲むことに抵抗があったのだろう。それにしても、と思う。Yさんは勤務中であったのではなかろうか。

19時過ぎに学校を出て、S事務長の家に転がり込む。殺風景な六畳の部屋で、四十代と三十代の男二人が「刈干」を前に杯を傾けている構図は、今の若い世代には想像もつかない光景であろう。

翌朝には決まって妻に叱られた。

「なぜ、断らないのよ」

「誘われたら断らないのが男の、美学」

「都合のいい美学ね、まったく」

叱られながらも飲む酒に深い味わいのあった遠い日が、こよなく愛おしい。

その翌年、S事務長の窪川高校への転勤をもってこの定期的で頻度の高い酒宴に終止符が打たれることになる。思い返せば、素敵な時代であった。徐々に職務規律がかましくなっていく過程を身をもって体感したものにとってはかけがえのない想い出といってよい。S事務長とYさんに感謝するしかない。

それから3年間を椅原で過ごしたが、やはり酒から逃れることはできなかった。当時の教職員のほとんどは、独身。山峡の街の夜の侘しさ。酒が二十代の滾るいのちを享楽する唯一の手段であった。そして、そこに私がいた。現在の酒量を一とすれば、当時の量は4ではなかったか。貧しい学生時代にもよく飲んだが、そのころでさえ2ないしは3であったというのに。それにしても、と思う。私だけが叱られながら飲んでいたという事実は重い。誘ってくれるなと心密かに念じたことも、一度や二度の比ではない。

異動で須崎高校定時制勤務となった年の七月。四国中央病院で人間ドックを初めて受診した。二泊三日の日程は快適であったが、最終日の総合診断で仰天すべき事実を告げられた。

「飲み過ぎですね。肝硬変の一歩手前ですよ。脾臓も相当腫れています」

いくつかの治療薬をありがたく頂戴し帰宅した夕刻。妻に一部始終を話し、

「よかった。酒の神様はまだ私を見捨てていなかったんだ」と付け添えた。

「ばかじゃないの。あんたもそうだけど、酒の神も」

なぜか、妻の語気が荒かった。

高校現場から

やりましたよ！学園祭

高教組教文部長　古畑邦明

秋になってコロナは落ち着いたが、学園祭を一般公開した高校は少なく、文化部の作品展示や校内発表だけで済ました学校がほとんどと聞く。私の勤務する春野高校は、生徒たちが育てた花や野菜、果物、それらの加工品がある。季節ごとに収穫した作物を販売するイベントが年4回あるのだが、これも未開催が続いていた。さあ、メインイベントの11月の学園祭はどうなるのか。

夏休みの8月終盤にコロナ第6波のピークを迎え、学園祭は無理だと教職員の誰もが思った。ただ、早々に中止宣言するのも生徒がかわいそうだし・・・と、中止の判断がのびのびとなっていた。9月になってコロナ感染は一気に収束し始めた。「さすがに一般公開はないな」というのが教職員の見立てだったが、日を追うにつれ「もしかしてできるの？」とだんだん学園祭が現実味を帯びはじめた。そろそろ準備しないと間に合わないぞ！11月に入ってから生徒も教員もエンジンがかかり出した。

私は科学部の顧問をしている。7月からメダカの研究を始め、学園祭でやりたいことも決めていた。メダカすくいだ。きっかけは、県内のメダカ愛好家や業者らが4月に開催した展示即売会を紹介した高新の記事だ。「よし、これだ！」と思い立ち、7月の即売会に科学部の生徒たち4名を連れて行くことにした。会場はヤシィ・パークの東。到着するとテントの下にプラ船が並び、赤や黒、ヒカリなど様々な色のメダカが泳ぎ回っていた。さあ、メダカすくい体験だ！部員ごとに好みの品種をすくい、それを夏休み中に自宅で繁殖させて学園祭までに一人100匹まで増やすぞ！

9月、夏休みが終わって部員に「どう、メダカ増えた？」とたずねるが、「よく分かりません・・・」「えっ！どういう意味？卵は産んだの？」「・・・」どうやらしっかりと世話をしていなかったらしく、水も濁ってしまい、メダカが水槽にいるかどうかも分からない様子。がっかりした私に美術の先生からうれしい情報が飛び込んだ。小津高校の先生がたくさんのメダカを提供してくれるという。さっそく約束を取り付け、私も部員も俄然やる気がわいてきた。

11月、コロナも完全に収束し、本当に学園祭当日を迎えてしまった。メダカすくいは大盛況。これを目当てに訪れた方や子ども連れの家族がたくさんすくってくれた。部員のお母さんや兄弟らも来てくれて、顧問としてもうれしかった。部員だけではお客さんの対応ができないので一般の生徒にも手伝ってもらったりと、部員にとっても良い経験ができた。

学園祭全体の内容自体は、食品提供は原則禁止で一般公開も午前中のみ。でも、さまざまな制限がありながらもクラス企画も音楽部等の文化部の展示発表もできた。地域の方々や中学生、卒業生らも訪れ、イキイキとした生徒たちの姿を久しぶりに見ることができた。

県下の高校は文化祭が隔年開催のため、これを逃してしまうと高校時代に文化祭を経験することなく卒業することになってしまう。そうならずに済んだことにある意味でホッとしている。

「ガラスの天井」を破る人々
～本で出あった女性たち～

田所金久

日本がバブルの絶頂期の1989年、暉峻淑子が「豊かさとは何か」を出版したとき女性の大学教授は皆無と言ってよかった。しかし、現在ではここに紹介する人たちを含めて非常に多くなり、アカハラ（アカデミックハラスメント）はあっても、「ガラスの天井」を破り始めている。

本田由紀　東京大学教授（教育社会学・日本労働機構研究員）

教育システムと他の社会システムとの関係・変化を追求

「教育は何を評価してきたか」（岩波新書　2020）で、日本の教育は先輩後輩など体育会的縦の秩序（欧米では実績を評価）と「みんなと同じ」と言う横並びを重視してきたと分析。なおいち早くタテ社会を論じたのは**中根千恵**（東大最初の女性教授　社会人類学　1926～2021、10）で「タテ社会の人間関係」を1970年に出版。

「老いたメカニズム　なぜ存続」という書評（ひもとく資本主義の解剖　11・6　朝日新聞）で「監視資本主義　未来を賭けた闘い」（東洋経済新報社）、「資本主義だけ残った世界を制するシステムの未来」（みすず書房）、「勤勉革命　資本主義を生んだ17世紀の消費行動」という3冊の本を揚げ、

4面（裏面）右上に続く